

# 大陸（北支）

## 私の戦争体験記

高知県 森下 茂

昭和十七年二月、親友と母とが付き添ってきてくれて奈良県高畑町中部第二七部隊へ入隊した。もちろん現役兵である。入隊直後、私たちは現地教育を受けることとなり、現中国北方の内モンゴルの地域部隊に入った。

当時の日本軍は北方ソ連の侵入を警戒していたのでモンゴルは、重要視されていた。そこで教育が終わって部隊命令で、さらに北方の街へ一人の世話係兵を伴いモンゴル語の修得に向向した。しかし中国語なら基

本を修得してあったから何とか消化するが、風俗、習慣、感情の全く違うモンゴル語にはまいてしまった。命令に従い得るものでないと知り、早々に切上げ原隊に戻ると、春期と秋期の作戦に参加する結果となった。その二回の作戦に参加したが今も特に忘れられないのは秋期冀西作戦だった。

冀西とは、当時北支の河北、河南、山東、察哈爾、綏遠の各省の中国共産党の政府（辺区）で、河北省は「冀」といわれて、その西方で行われた作戦である。駐屯地からおよそ一二〇キロ西南のその地に進出して行った私の所属していた部隊（独立混成第二旅団、独立歩兵第五大隊第二中隊）は、徒歩で歩きづめで、出発後四日目、夜に跨った午後四時ごろその地域に着いた。そこはすごく対日感情が悪いため炊事班が食事を

作れない（火を炊けば煙を目掛け集中攻撃を受ける）ため、持参してきた小さい粟餅二個を各人に配ってくれた。この餅二個だけで翌日の夜十二時ころまで引く張らねばならないとは、考えもしなかった。休憩のわずかな時も歩哨を立てておいて、その餅を茶で腹に入れた。

そこは敵地であるため頑強な抵抗があるとみていたし、標高三千メートルといわれる山岳地帯の細い道であった。我々の行くのを先回りして待っている敵、今夜あたり合戦があると予測しながら、先頭に捕虜と現地を知っている道案内、弾薬など重量物を運ぶ家畜が行き、これに続き先兵（斥候役）、指揮班（部隊長及び参謀らとその世話役兵）、次に一般兵の一、二、三、四、五の各中隊の順でその縦列の距離は、四千メートル以上にもなっていた。

草木が一本もない山道の行進で夜八時ごろ右方上部からにわかには滅茶苦茶に撃ってきた。そのとき全く無意識でだれもが、応戦できやすい下方の斜面に兵器を抱き、寝転びながら移った。反撃準備して命令を待つ

たが参謀もとっさのことで命令を出さなかった。耐えられなかった年長兵は、「撃ってよいか」と小声で聞くと、「よし撃て」の命令、軽機関銃と重火器が一斉に山上めがけて火を吹いた。

銃声がすごかったので敵はたちまち逃げ出し、それ追えと暗い山道をたどって行って、ようやく山頂付近で夜が明け始めた。朝になっても飯は無し、腹は減るし持っている乾パンはお茶がないと食べられない。既に水筒はカラッポ、その上眠気も少しあつてヤケツパチ気分でフラフラしながら部隊の最後尾について行った。

私は、そのとき擲弾筒手だった。擲弾筒は当時日本軍が使っていた兵器の中でも最も殺傷力が大きかったもので、合戦の際は部隊の後尾に行くのが決まりだったので、ヒョロヒョロしながら私がまともに部隊について行かなかつたのを、和歌山県の白浜町で今も健在でいる橋本氏が私を見かね、私の私物荷（背負袋で米食料下着など）を持って行ってやるからと、無理矢理私から取り上げ峠に向かったが、そこには敵が先回り三百メ

トトルぐらい先で待ち構えていた。橋本氏は分隊長だったので背を低めて行けと指示してくれたがよく聞き取れずにいると、後から私を突き飛ばし、前のめりになった瞬間、私の頭上を弾が飛んできた。弾は橋本氏の腕をかすめ側の巨大な岩に当たった。私が今生きているのは、あのとときの橋本氏の措置のお陰であると感謝している。

その峠をはさんで敵との交戦になって、逃げる敵を追っかけてゆく。敵は下山して行くが、それが敵の誘いであることが、そのときは我が方には分からなかった。二時間ぐらい掛かって、やっと下山した所で、空腹に耐えかねた私は、道の側に植えてあったじゃが芋を失敬、洗いもせず生で食べながら進んで行くと、私の直ぐ前を歩いていた一年下の同班の兵が、その道路に仕掛けてあった地雷を踏み、破裂した破片で私は頭部に火傷を負った。運が良かったとその時思った。最期の様を現していたので彼の側に駆けて行き、背中を叩き「何を言うか、しつかりせんか」といいながら部隊の前進を止めさせ、捕虜に付近の民家の戸板を持つ

てくるよう前方へ申し送り依頼、それに載せ捕虜に運ばせた。さっきの敵の誘いは、この地雷だったんだと後で分かった。

次の部落でやっと飯にありついた。午後十二時ころ、その戦友は、息を引き取ったので、その場で茶毘に付し、遺骨を首に下げた。敵の追撃に駆けると、箱の中ので骨が音を立てて泣いていた。このときの苦戦の模様を橋本氏も中隊史に書かれている。

やがて鉄道のある駅で遺骨の輸送を依頼して前線へ戻ると、旅団本部から緊急命令の無線があった。内容は、直ちに部隊は遥か彼方へ総移動せよとのことだった。ここで部隊長は、怒りを表にだし、「命令には、従えない。兵を休ませずには、戦えない」と言って駐屯地に直ぐ引き返したので私たちも解放された。

戦争がいよいよ激しくなってきた、私は航空隊に転属させられ、さらに激務に就いた。このことは、後の項に譲る。

【解説】

—私の戦争体験記—

昭和十七年四月下旬の北支方面軍の編成は次のごとくであった。

方面軍司令官 岡村寧次大将

参謀長 足立二十三中将

第一軍 軍司令官 岩松義雄中将

第三十六師団 第三十七師団 第六十九師団

独立混成第三旅団 独立混成第四旅団

第十二軍 軍司令官 土橋一次中将

第三十二師団 第三十五師団 第五十九師団

独立混成第五旅団 独立混成第六旅団

独立混成第七旅団 騎兵第四旅団

駐蒙軍 軍司令官 七田一郎中将

第二十六師団 独立混成第二旅団 騎兵集団

方面軍直轄兵団

第二十七師団 第四十一師団 第一百十師団

独立混成第一旅団 独立混成第八旅団

独立混成第九旅団 独立混成第十五旅団

体験記執筆者の森下氏所属部隊は独立混成第二旅団

(響兵団) 独立歩兵第五大隊 (響第五三三六部隊) で

あるが、同旅団、同大隊は最古の部隊であり、北支で

の歴戦の部隊であった。また、独立混成旅団は独立大

隊五個大隊、騎兵隊、工兵隊、通信隊の編成であるが、

労多く、常に危険な戦闘、しかも地味な任務を負った

部隊である。

この部隊は支那事変勃発以来、戦闘師団の占領後、

治安未だ定まらぬ時期から、終戦に到る間、共産軍と

戦闘を続けたのである。特に終戦時、侵入ソ連軍、蒙

古軍から在留邦人を守りつつ戦った部隊である。

十七年に独立第二旅団は司令部を蒙古張家口に置い

てあったが、その東方を満州と接しており、大同には

第二十六師団(泉)、包頭には戦車第三師団が位置して

いた。

昭和十七年、五月からの北支方面軍の各作戦と作戦

経緯を別記する。

五・一五〜七・二〇 (山西省東南部共産軍掃討)

五・二四 (河北・山西・河南省剿共戦開始)

六・五 (黄河岸オルドス地区作戦開始)

八・一二 (八・一五)

(山東省中部山地丁学忠総司令官捕獲企図)

九・二七 (一〇・五) (山東省西方共産軍掃討)

一〇・二〇 (一一・一九) (金山西秋季剿共作戦)

一一・一九 (一二・二九) (山東半島共産軍掃討)

一八・四 (一八・五一)

(河北省西部の北部太行山脈山内共産党軍肅正)

四・二〇 (五・二二)

(山西省南部、太行山脈内重慶軍掃討)

五・二四 (六・二〇) (山西省南部の

残存重慶軍掃討)

七・一〇 (山西省南部重慶軍掃討)

九・一六 (一一・一〇) (一八秋冀西作戦及び

河北省西部山地共産軍根拠地覆滅)

九・一六 (一二・三〇)

(河北省東部冀東・津海地区共産軍掃討)

九・二〇 (一九・六・九) (特別警備隊第一期作戦)

九・二六 (一二・一〇) (秋季肅正作戦……)

十八秋冀西作戦(才号作戦)

北支方面軍ハ九月二日、次ノゴトキ作戦実施命令ヲ下達シタ。

一、方面軍ハ九月十六日以降約二ヶ月間ノ予定ヲ以テ冀西地区共産軍主力(第三、第四区分)ヲ攻撃シ其ノ根拠地ヲ覆滅ス。

二、第六十三師団ハ九月十六日日没後一部ノ挺進隊ヲ突進セシメ滿城及唐県各西北ノ敵地区中枢ヲ急襲シ敵ヲ牽制抑留シツツ適時之ヲ撃滅スルト共ニ爾後敵ノ根拠地ヲ求メテ敵ノ撃滅、根拠地ノ覆滅ヲ期ス戦闘司令所ヲ十七日仏曉保定ニ開設ス

三、第一百師団ハ十六日日没後一部ノ挺進隊ヲ突進セシメ……中枢ヲ急襲シ敵ヲ牽制抑留シツツ……根拠地ノ覆滅ヲ期ス 戦闘司令所ヲ二十二日靈寿ニ開設ス

四、甲兵団(歩兵第六十三旅団長ノ指揮スル歩兵第三大隊基幹)……戦闘司令所ヲ十六日孟県ニ開設ス

五、乙兵团（独立混成第三旅团长ノ指揮スル歩兵第三大隊基幹）……戦闘司令所ヲ十六日東治鎮ニ開設

六、丙兵团（第二十六師团长ノ指揮スル歩兵第六大隊基幹）ハ十七日夜靈邱、浹源附近ヨリ行動ヲ起シ：

戦闘司令所ヲ十六日広靈（靈邱北約三五キロ）ニ開設ス

方面軍は十六日夜、既定の構想に基づき進攻。九月末までの第一期作戦の戦果は敵主力は極度に戦闘回避に努めたため戦果は僅少であった。

各兵团は作戦の長期化に伴う敵の困憊に乘じ、活発に追躡撃破し、あるいは掃蕩剔抉し、また敵遊撃戦法を逆用する等創意工夫に努め、十月二日から第二期作戦、同月二十三日から第三期作戦において相当の人的、物的戦果が認められた。作戦当初の活発だった遊撃戦、地雷戦、後方治安攪乱も低調となり、一部には帰順投降する者さえ漸次増加し、阜平周辺の敵軍政中枢諸機関を覆滅し、多量の抗戦資材を摘発した。

第三期作戦を一カ月延長、徹底掃討実施、十二月十

日終了。敵の遺棄屍体四、三〇〇、俘虜二、六〇〇、覆滅施設一、六六〇、ほか鹵獲兵器、弾薬、資材、雑穀など莫大な量に達した。

### 駐蒙軍自動車第二十三連隊

#### 主力引揚げ後の残留部隊

山口県 叶谷孝一

内蒙古の厚和・包頭などにいた部隊で、駐蒙軍主力が昭和二十一年五月、内地に復員した後に、なお多くの人（軍人・一般邦人）が残留していました。その人々の記録を記述いたします。

昭和二十年八月十五日、日本の敗戦を内蒙古の大同で迎えました自動車第二十三連隊本部は、駐蒙軍司令部の命令により張家口に引き揚げました。第一中隊と厚和の第三中隊の一部が大同に引き揚げ合流、その後、私の所屬しました第一中隊は、第四独立警備隊（至誠部隊）の坂本少将の指揮下に編入されました。終戦後、